



紙が支える

川越宗一

朝、起きてすぐコーヒーを淹れるのが日課になっている。

湯を沸かし、寝ぼけまなこでペーパーフィルターを取って隅を折る。言い換えれば、ぼくの一日はフィルターという紙に触れることで始まる。

それから自室に籠り、資料のコピーや参考書籍とにらめっこし、七転八倒しながら文章を書く。ぼくは原稿用紙ではなくパソコンを使うほうだが、推敲の時は原稿をプリントして赤ペンを入れていく。

毎日、段ボールか厚紙で梱包されたなにかの物が家に届き、ポストには郵便物と大量のチラシが投じられている。またぼくは鼻づまり気味の体質なので、通りが悪くなればティッシュペーパーを使う。ビロウな話で恐縮だが、毎度のトイレでも紙にはたいへんお世話になっている。してみればぼくの一日はたいへん、紙に触れて明け、暮れる。

紙に触れて明け、暮れる。

現代社会も、紙に大きく依存している。膨大な記録や言論が紙で行き交い、大量の生産物は紙で梱包されて流通し、また清潔な生活を実現している。さまざまな形、用途の紙が、文明と個人の暮らしを支えている。

そんな紙は、長らくの通説では西暦二世紀の発明とされていた(ぼくもそう思っていた)。実際はさらに前、紀元前二世紀ごろには世にあったという。なんにせよ、紙はだいたい二千年にわたって人類の歴史に寄り添ってきたことになる。技術の進歩や製造者の努力が加わりつつ、植物の繊維を薄く漉いたものという基本的な形は変わっていないだろう。紙はその誕生の時点で、すでに完成していたといっていると思う。

他のものについて考えてみる。

例えば時計。これも紙と同じく長い歴史を持つ。だが時を取り出す源は、太陽の位置やそれを反転させた影、水や砂の移動、重りや振り子の運動、水晶の振動、原子の振る舞いなどなど、ずいぶん変わってきた。

歴史上の画期的な発明といえば、飛行機が思い浮かぶ。こちらは「推力によつ



かわごえ・そういち●作家。鹿児島県生れ、大阪府出身。龍谷大学文学部史学科中退。2018年「天地に燦たり」で第25回松本清張賞を受賞し、デビュー。短篇「海神の子」が日本文藝家協会の選ぶ「時代小説 ザ・ベスト2019」に収録。2020年、「熱源」で第162回直木三十五賞、第9回本屋が選ぶ時代小説大賞を受賞。

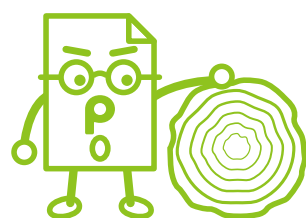
て前進し、その際、翼に生ずる揚力で自分の重量を支えて飛ぶ」(『日本大百科全書』)という原理こそ変化はないが、ライト兄弟が生んだ動力飛行機と現在の航空機は、ずいぶん見た目が違う。もちろん、変化や改良によって元の発明の価値や重要性が損なわれることは全くない。いっぽうでぼくは、紙の「誕生にして完成」(と言い切るのには性急すぎるかもしれないが)という特徴に、深い畏敬の念を抱いてしまう。そんな勝手な感想はさておいても、新しい時計の設計者やライト兄弟がその仕事を全うするために、植物の繊維を薄く漉いたアレは欠かせなかったはずだ。

紙が寄り添い、発展させ、支えている文明世界の片隅で、ぼくは今日も文章を書いている。誕生にして完成というわけにはいかないから、書いては消し、書いては直しを繰り返しながら。そして、人類の歴史に二千年とは言わなければ、誰かの心に数瞬でも置いてもらえるものになりますように、と願いながら。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

無駄なく使うこと、得意です。

古紙のリサイクルだけじゃない。建築用の木材をつくるときに出た残りの部分や古い木材、曲がった木など、木材として使い道が少ないものも紙づくりには利用できる。そうやって、資源を無駄なく大切にしながら、紙はつくられているんです。



有効利用している主な木材

- 製材残材** 建築用の木材をつくるときに出た残りの部分
- 低質材** 細い木、曲がった木など、製材には使えない木材
- 間伐材** 森を育てる過程の手入れとして間引かれた木材

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は12/31・2021/1/7 合併号、松本幸四郎さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Atsushi Hashimoto